



Title	陶淵明の隱逸詩とその思想 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	熊, 征
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15526号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/89376">http://hdl.handle.net/2115/89376</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Zheng_Xiong_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 熊 征

## 学位論文題名

陶淵明の隠逸詩とその思想

### ・本論文の観点と方法

本論文では、陶淵明の隠逸詩およびその背後の思想について、新しい観点、ユニークな方法で分析をおこない、研究手法として思想・文学・歴史・宗教などの学問分野の垣根に拘らず総合的に研究し、陶淵明の独創性（独特性）をより鮮明に描き出そうとする。具体的には、隠逸の思想の系譜を踏まえた上で、その中の特に楊朱の死生観や人生観との関係を考察し、湛方生と江淹という二人の詩人の生き様との比較を通して陶淵明の気質を明らかにし、六朝期における陶淵明評価の矛盾を社会一般の評価と個人的愛好の評価などの観点から緻密に分析し、陶淵明の隠逸文学の表現における「門」のイメージなどの独自性（独特性）を考察して、ついには「隠逸詩人」としての思想や文学の特色が、まずは人物像として評価され思慕された延長線上に、隠逸文学の表現の真価も認められ、それらが相俟って文学史上の評価を大いに高めて今日に至る、その淵源をしっかりと捉えて解明する。

### ・本論文の内容

第一章では、中国の隠逸思想の淵源を整理し、儒家と道家における隠逸的な考え方の特徴を考察する。『詩』『易』などの文献に関する後世の注釈書に言う「隠」の生き方や「隠」に関わるイメージは後世の思想家や詩人が隠逸を思慕する際の起点となる。儒家における隠逸は、基本的に『易』の「時」の思想を受けた出处進退の考え方だと言える。ただし、孔子のいう「隠」は「行」における「隠」というよりも「言」における「隠」であり、婉曲に「無道」な政治を批判するのが本当の主旨である。道家においては、老子の無為・自然、「名遂身退」の思想や、荘子の自然や万物との一体、そして個人の自由を守る思想などが、政治環境から自然環境にかえるという隠逸行為に理論的な根拠を与えた。ただし、老子が説く「隠」は統治者を対象とし、為政者としての治め方または現実社会への処世術としての面がある。対して、荘子が説く「隠」は主に個人を対象とし、精神上の自由を求めるが、徹底的で理想的であるがために実践が難しい。そこで、楊朱（楊朱学派）の思想では、その隠逸の基準が「為我」つまり「我」のためになるかどうかにかつて在るため、隠逸自体は個人の境遇、時代の環境によって改変可能なものになる。これこそ六朝期の乱世に生きる隠者らにとって実践的で受け入れやすい隠逸思想となった理由だと言える。六朝時代、隠逸の風潮の流行に伴って、儒家と道家の思想的融合は深まり、陶淵明のような隠逸詩人が現われ、生き方の模索や思想の変化や融合を具現化するようになったのである。

第二章では、陶淵明の隠逸詩における楊朱思想の影響を考察する。第一節では、主に「我」と死・生、名実論と「生」、「裸葬」という三つのテーマから、陶淵明の死生観における楊朱思想の影響を考える。『列子』楊朱篇における死生観の特徴は、死と生を明確に区別

し、免れ得ない死を出発点として生を顧みるといふ思考構造によって、当生を楽しむといふものである。陶淵明が、その詩に見られるように、死の恐怖感を超越し、死と生とを明確に区別し、死と生に対して冷静な態度をとっている点は、楊朱思想を受けている可能性が高いと推測できる。また、この思考構造に基づく名実論にも楊朱と同じ方向性を持つ要素が多く、死によってすべてが消滅するから、「裸葬」を受け入れるところも楊朱の態度に近いと言える。第二節では、陶淵明の隠逸詩の中、直接楊朱の名を挙げた「飲酒」其十九と五言「答龐參軍并序」について、「楊朱泣岐路」のエピソードを踏まえ、人生の岐路における慎重な態度に深く共感するところ、さらに、楊朱篇の内容と関わる史書の故事や人物を陶淵明が引用する際にも思想的な接近が見受けられることを明らかにした。

第三章では、六朝期の隠逸風潮において、湛方生および江淹という二人の詩人との比較を通して、陶淵明の隠逸詩人としての気質の特徴を明らかにする。当時流行した玄学に服膺し純粋に道家的な「隠」を求める湛方生と、儒・道・仏を区別せずに受け入れ「隠」に憧れるも実践上は控える江淹とは異なり、陶淵明は「隠」と「仕」との間で徘徊し、死と生、名と実など現実的哲学的な問題に直面し、その隠逸実践の中で道を求め続け、その過程を隠逸詩によって表わす。「道」を守ろうとして悩む一面と、「死」の虚無を起点として「生」を諦観する一面という両面性が、隠逸詩人の独特な気質を形成する。

第四章では、六朝期における陶淵明評価をめぐって、代表的な文学批評者でかつ後世の陶淵明評価に重要な影響を与えた江淹、鍾嶸、蕭統と蕭綱の四人を主に取りあげ、その詩文評価と人物評価の特徴を丁寧に分析する。六朝期では「質」よりも「文」を重視する文学観が主流であり、四人の評価はいずれも陶淵明の人物評価に重点を置き、文学のほうは当時の一般評価に合わせてあまり高くない。一方で、顔延之の「文取指達」によって評された陶淵明の「質」の充実、江淹の擬詩によって提起された陶淵明の隠逸詩人・田園詩人としての人物像、貴族階級の代表で文壇の中心でもある蕭綱と蕭統が表明した陶淵明に対する個人的な愛好は、唐代以降における陶淵明の詩文の真価が認められるための条件を提供した。加えて、鍾嶸の品語に隠された陶淵明の詩文に対する高い評価、蕭統による陶淵明の詩文の編纂と『文選』への編入は、二人が社会一般の評価とは異なり、陶淵明の隠逸詩の文学上の価値を個人的に高く評価した証拠となることを明らかにした。

第五章では、陶淵明の隠逸文学の表現における独自性（独特性）について考察する。

第一節では、六朝期の詩人である阮籍と陶淵明の詩文における「門」のイメージについて比較した結果、共通点として、二人とも隠逸の懐抱を述べる際に具体的な場所を指す「衡門」「籬門」など門に関わるイメージを用いること、一方、相違点としては、主に「門」に託した思いおよび「門」に関わる動作・動機が、阮籍の場合には「出門」を繰り返しつつ「門」を通して現実と理想の聯結を求めていたが、陶淵明の場合には、「門」が境界線となって、門内の隠逸空間と門外の仕官の道を区切り、門内における楽しみ苦しみと門外の道に対する葛藤とが交錯する複雑な心情を、「門」の開閉によって表現していることを明らかにした。かくして阮籍の「出門」よりも陶淵明の「閉門」のほうが後世において「隠逸」の意を表明するイメージとして受け継がれていく。第二節では、「雑詩」其十二、「擬古」其七と「閑情賦」を取りあげて、陶淵明の詩文における「美色」について考察する。悩みを抱く「佳人」、若く弱くも困難を乗り越えようとする「柔童子」、内面の剛と外面の柔を備えた美人など、その「美色」の描き方は異なるが、内面的な感情や品格の超俗性

に共通性があることを解明する。また、詩文に使われる「松」「雲」そして「音楽」などのモチーフによって、三首の詩で表わされている「美色」の超俗性はほかの隠逸詩と共通する面が多く、「美色」に託す「志」には隠逸への憧れが含まれる可能性が十分にあると主張する。

以上の五章の考察を通して、思想や文学などの多方面から陶淵明の隠逸詩人としての獨創性（独特性）の本質に迫り、これを見事に解明している。